

## 研究ノート

梅津順一著『ピューリタン牧師バクスター』（教文館、2005年）  
を読んで  
——バクスター研究から見るウェスレー

藤本 満

2010年9月、日本ウェスレー・メソジスト学会は、日本におけるバクスター研究の第一人者である梅津順一氏（青山学院大学・文化総合政策学部教授）から学ぶ特権を与えられた。ウェスレーの母スザンヌの父アンズリーがバクスターと親交があったこと、エプワース牧師館におけるしつけ・教育・生活の雰囲気は基本的にピューリタンのであったこと、またウェスレーに多大な影響を与えたジェレミー・テイラーやウィリアム・ローなども広義に（政治的な意味ではなく、神学的理解・信仰的生き方において）ピューリタンのであったこと、ましてや17世紀英国の霊的巨人バクスターと18世紀英国の霊的巨人ウェスレーとの比較、等々を考えれば、ウェスレーを学んでいる者がバクスター研究から資することは大であることは、至極当然なことである。

しかし、そのことが必ずしもなされて来なかったように思う。ウェスレーに流れ込んだピューリタニズムの研究で有名なのは、ロバート・モンク（Monk）「John Wesley: His Puritan Heritage」（出版は1966年）であった。モンクは、それまでのウェスレー研究がウェスレーを宗教改革者（カルヴァンとルター）との関わりで論じてきた傾向に異論を唱え、時代的により直接的なピューリタンの視点からウェスレーを考察した。この書がプリンストン大学での博士論文であることを考えたら、それが十分な資料分析に基づいた信憑性の高いウェスレー解釈であることには間違いないが、少々ウェスレーをピューリタン化しすぎたという批判があったことは事実である。マルチン・シュミットはモラビア派の敬虔主義の観点からウェスレー理解を掘り下げ、フランク・ベーカーやゴー

ドン・ラップは、ウェスレーは心髄において英国国教会司祭であることを強調し、やがてアルバート・アウトラーの示唆のもと、ウェスレーに流れる東方教父の神学へとウェスレーを理解する土台は広がっていった。

評者は、梅津氏の講演を聴き、また本書を読み、確かに様々な神学的潮流が豊かにウェスレーの中に流れ込んでいる故にピューリタンの視点からだけではウェスレーを捉えることはできないが、ウェスレーが受けたピューリタンの影響、また特にバクスターの存在は絶大であったろうと、ピューリタニズムをウェスレー研究において見過ごしてはならない、またその取り扱いが軽々であってはならないと再認識することができた。事実、ウェスレーによる出版された150の説教に膨大な注をつけたアウトラーが最も注意を払ったのは、17世紀英国の資料、すなわちその時代に国教会の神学書、そしてピューリタンの神学書・説教集であった。時代的に最も近いところにウェスレーを紐解く資料があることを、往々にしてウェスレー研究者は看過する傾向にあったことを反省させられる。筆者も梅津氏の多数ある著作の一冊をもとにして本稿を書いていることも反省しなければならないと思う。

梅津氏のピューリタン研究は不動のものであるし、評者がここで氏の研究そのもの、また本書を通してなされた日本のキリスト教会への貢献などを批評することは意味がないと思う。そこで、簡単に本書を紹介した後、ウェスレーに学ぶ者の一人としての私が、本書から学び考えさせられたことを記し、研究ノートとして掲載することを許していただきたい。そうするのは、本書がウェスレー研究にとって重要な示唆をさまざまに投げかけているという強い確信の故である。

本書は二部構成から成っている。第一部「牧会者リチャード・バクスター」は日本基督教団滝野川教会の『形成』に連載された短編論考をさらに整えて40編170頁と、加藤常昭氏が主催する説教塾での講演に基づき「バクスターの牧会と説教」に焦点を絞った30頁の論考が掲載されている。40編は特定の字数制限をもってバクスターに初めて接する人にもわかるように意図されたのであろう。論の運びに無駄がなく、コンパクトな文章の中に著者の豊かなバクスター研究の成果と日本の教会に資するようという願いが凝縮されていて、一般

『ピューリタン牧師バクスター』を読んで  
読者、特に私のような初心者にとっては浅くも深くも学ぶことができる不思議な魅力にあふれていた。40編は、バクスターの生涯と思想の概略を紹介しているだけでなく、ピューリタン革命を前後した英国の政治情勢と教会事情など、牧会者バクスターに焦点を当てつつも、17世紀英国という背景で理解するに十分な情報を歴史的に提供してくれる。また各編でバクスターの言葉が直接に引用されていて、直接にバクスターを読むことができる。そして著者は、「バクスターの牧会と説教」で、バクスターがキリスト教会に残した最大の遺産と言える「牧会と説教」に関する様々な教えと示唆を、現代の日本の牧師たちのために掘り下げて論じている。

第二部では、バクスターの主要な著作、『自叙伝』『改革された牧師』『キリスト教指針』の抄訳が約100頁にわたって提供されて、この一冊をもってバクスター研究の教科書になり得る。

以下に、最初の40編(170頁)に絞って、本書の内容を断片的に紹介しながら、一人のウェスレーに学ぶ者、私個人が、本書から何を考えさせられたかを記すことによって、より多くのウェスレー研究者が本書に親しむことをお薦めしたい。

## I. 分裂の時代に教会一致

バクスターの生きた時代は、英国の政治史・教会史において激動の時代であった。王権神授説を唱える国王、そして絶対的な権威をふるう国教会に反旗を翻してピューリタン革命が始まるのは1642年。バクスターは革命直前の38年に国教会の按手札を受けており(19頁)、内乱期には議会軍の従軍牧師として、またクロムウェルの共和政期では教会政策のための諮問委員会のメンバーに選出され、さらに60年の王政復古では復帰した国王のチャプレンも一時期務めるほど用いられた。バクスターは、ピューリタン神学者の筆頭に挙げられるが、実際は党派精神から自由で、教会一致を求めて活動していたことを梅津氏は指摘している。一国一教会、一地域一教区という国教会制が崩壊していく中、いわゆる congregation と呼ばれる自発結社の教会が数多く登場し、「それがもた

らす混乱を憂慮して、多様性を許容した国民教会の形成を求めて」（22頁）、バクスターはクロムウェルの共和政期でも王政復古の時代でも、教会一致を原則として活動していた。「彼の主著『キリスト教指針』は、ピューリタン指針ではなく、「カトリック教会を含めたキリスト者の正しい教会のあり方」を提示しているという。つまり、教理の相違も、礼拝形式の相違も、「聖徒としての生活における一致」（24頁）によって乗り越えられるとバクスターは考えた。

## ●ウェスレー

ウェスレーはメソジストを率いて50年しても、いまだに「私は初代教会の次に、私たちの英国国教会を世界時で最も聖書的な国教会として敬ってきた。自分は国教会の会員として生涯を貫く」（*Works* xiii, 272）と記すほど、英国国教会を愛してきた。1760年代に、メソジストの中から国教会からの分離の動きが出てくると、説教75「分派について」を記した。また1787年には国教会の靈的沈滞や制度的不純を嫌って国教会の礼拝を避ける人々を対象に説教104「教会の礼拝に出席することについて」を記して、国教会の礼拝にあずかることの義務を説いている。メソジストこそは、国教会全体のパン種となって、内側から改革する使命を与えられているというのがウェスレーの自覚であった（説教112「新しい礼拝堂の基礎を据えるにあたって」ii, 12-13）。

だが正直、このパン種は国教会にしてみればやっかいな存在であった。当時の主教の誰一人としてウェスレーとメソジストに理解を示す者はいなかった。野外説教、信徒伝道者の採用、その熱心さは目に余るほどの勢いであったし、また何よりもウェスレーを中心に、ソサエティー・組会、年会や伝道者の巡回制度など、「*ecclesiola in ecclesia*(教会の中の小教会)」と呼ぶにはあまりにも独自の動きが目立ったからである。ウェスレー個人がどんなに国教会への忠誠を貫き、英国においてメソジスト伝道者に按手礼を授けることを拒否したとしても、メソジストは別組織で動いており、ウェスレーの死後に国教会から離脱したことは歴史的に必然であったと思う。

バクスターが、ピューリタンの共和政期と王政復古期という両極端の時代に重用され、一貫して「多様性を許容した国民教会の形成を求めていた」のに対して、ウェスレーはメソジストという大きな群れを率いて、王政復古が一段落

『ピューリタン牧師バクスター』を読んで  
して落ち着きを取り戻した英国国教会の中でつむじ風となったという点を比べると、後者は忠実な国教会人でありながらも、はるかに過激な存在であったであろう。

しかし、両者は、多様性を許容したキリスト教、あるいは教派を越えてキリスト者の正しいあり方を求めていたという点では、同レベルの意識で動いていたように持っていたように思う。以下に引用するウェスレーの晩年の言葉は、メソジスト創設以来一貫していた。

天の下に、入会条件として、自分自身の魂を救いたいという願望以外に何も要求しない宗教的ソサエティーが他にあるであろうか。回りを見てご覧なさい。国教会でも、長老派やアナバプテスト、クエーカー、他のどこのソサエティーでも、会と同じ意見(*opinion*)を保って、同じ形態の礼拝を守らない限り、入会は許してもらえないのが普通である。

メソジストだけが、あれこれと特定の意見に固執することをしない。自分で考え、そして考えさせればよい。また、メソジストは特定の礼拝形態をあなたがたに強要することもしない。なんであろうと以前の方式を継続すればよい。私の知っている限りでは、使徒の時代以降、古代でも現代でもこれほど良心の自由が許されている宗教的ソサエティーは、他に類を見ない。ここに我々固有の誇りがある（日誌、1788.5.18、参照説教 107 「神の葡萄畑について」 ii, 8）。

無論、17世紀の宗派の抗争の時代を経て、18世紀は宗教的寛容の時代の恩恵をウェスレーは受けていたと言える。教派を越えてキリスト教を理解しようとするウェスレーの様々な考え方の中でも、説教 39 「共同の精神」は、啓蒙主義的な時代の「個人の判断の自由」、また主義主張を軽視する (*Latitudinarians*) ではなく、個々の独自性を重んじながらも多様性を包含するキリスト教のあり方、さらには論争神学ではなく和協神学を具体的に論じる意味では、バクスター精神の18世紀版とも言えるのではないだろうか。

## II. ピューリタンの敬虔

バクスターが少年の頃、住んでいた村の教会で祈祷書を読んでいた読師は、

お祭り騒ぎに興じていた（29頁）。革命直前のキダーミンスターの町にバクスターが説教者として派遣された頃、「当時の教区牧師である司祭は『無知で、四季ごとに一度しか説教せず』……副牧師もまた『酒びたりで口汚い喧嘩好き、無恥で、子どものための教理問答の基本的な事柄さえも理解していない不十分な男』（39頁）であったという。革命期に長期議会は「醜聞をもつ牧師に対処する委員会」を設立するなどして牧師の向上を目指す、共和政期・王政復古期と教会一致に力を尽くしたバクスターは、結局一致が実現しなかった理由の一つとして「牧師たちは依然として、彼らの自尊心と強欲と論争によって教会を戸惑わせている。最悪の者が最大の者となることを求め、そう求めることがそれを獲得しがちであること」を挙げている。著者はこのような問題意識がバクスターの有名な『改革された牧師』を生み出したことを指摘している（68頁）。

『改革された牧師』には、長文の副題がつけられている（69頁）。副題には、牧師が「その職務の開始に際して守った懺悔の人のために準備されたもの」という下りがある。著者は「では、牧師たちはここでどのような罪を懺悔したのか」と問い、その答えは以下になっている。「……具体的にはさまざまな罪が挙げられていますが、教会の分裂、罪ある人びと、それに滅びに瀕する人びとを放置してきたと、教会が問題多い人びとを公然と受け入れ、容認していたことをも懺悔したのでした」（70頁）。つまり、戒規の徹底が改革された牧師による牧会によって生み出されるピューリタンの敬虔の核となっていたことがわかる。この点がとても特徴的であるので、もう一文、梅津氏の言葉を引用する。「そこで牧師たちは、基本教理にしたがうかぎり教会の一致を追求し、牧会活動として教会員の一人一人の魂への配慮を怠らないこと、また牧師の指導、勧告を平然と無視するような人々には、断固とした態度をとることを申し合わせたのでした」（70頁）。

もちろんバクスターが目指したのは、後のニューイングランドで展開されるような厳格なピューリタンの律法主義ではない。梅津氏は、バクスターが牧会（魂のケア）を牧師の職務として前面に打ち出していたことを説明する（73-76頁）。公の説教も牧会の一つの方法ではあるが、バクスターは教会員との個人的な接触を重要視したという。「『できるだけ完全に人々の状態を熟知するこ

『ピューリタン牧師バクスター』を読んだとを務めなければならない』と言われています。その人の性格、回心、陥りがちな罪、怠りがちな義務、よく受けがちな誘惑、これらがどのようなものかを知らなければならないというのです。医者が病人一人一人の体質や病状を知らなければならないように、牧師は会衆一人一人の魂の状態、その傾向、問題点を知らなければならないのです」（74頁）。ピューリタン牧師が「魂の医者」（85頁）と呼ばれていたのには、そのような牧会的配慮の行き届いた姿勢があったからである。

### ●ウェスレー

メソジストのソサエティー入会にあたっての条件は、「来るべき御怒りを避け、罪から救われたいという願望を持っていること」というだけの単純なものであった（*Works VIII*, 270）。だが、メソジストであり続けることは、気軽な選択ではなかった。1743年には「ソサエティーの規則」が作成されている。そこには、入会後に、（1）すべての罪（害）を避けること、（2）あらゆる種類の善を行なうこと、（3）神の定められた恵みの手段をすべて活用すること、という具体的な形で、入会時の「救われたい」という願望を真実に生きることが求められていた。ソサエティーや組会に出席するために会員証が発行され、また「福音にしたがって歩んでいない」人々は、それらの罪が悔い改められるまで除籍処分を受けていた。例えば、1787年6月26日の日誌を見ると、ウェスレーはダブリンを訪れ、120名の会員を除籍させているというほどの出来事もあった。

ウェスレーが馬の背に乗ってイギリス、アイルランドと巡回するとき、それは単に野外説教やソサエティーでの聖書講解のためだけではない。彼は多大な時間をメンバーのために割き、それぞれの真実な霊的必要に応え、霊的に勢いのある運動の中で、彼は細心の注意を払って健全な神学を教え、霊的な助言や指導にあたり、個人のために多くの時間を割いた。信仰者にとって、霊的な事柄、またそれ以外の日常的な問題を、心を開いて自由に打ち明ける友のような存在が必要であり、そしてその人物の霊的な見識、正直な意見、慰めと励ましがいかにキリスト者を成長させていくか、こうした牧会的ケアを組織的に実現させたのが、ソサエティーや組会、また班会であった。

梅津氏は、バクスターが霊的なケアを施すために牧師だけでは間に合うわけではなく、霊的に成熟した「堅固なキリスト者」がそれらの牧会的指導や相談のることを勧めていたことを記している（99, 101, 131 頁）。ウェスレーはそのような人物を登用して、組織的に何百人といるソサエティーの会員一人一人に行き届く牧会をするシステムを作り上げた。

また、こうした牧会のためにウェスレーが手紙を用いたことにも触れておきたい。現在出版中の新版ウェスレー全集には、彼が個人に宛てた手紙約 3500 通が収録されている。彼の生涯を 10 年単位で区切ると、70 歳を超えた 1771～80 年には千通、次の 1781～90 年では 1300 通と、後半に行くほど手紙を各数は増えている。つまり、年齢が重なって巡回をこなすことができなくなったウェスレーは、魂のケアのために常にペンを執っていたことが分かる。

当時、手紙が唯一の通信手段であるから、手紙を通してたましいのケアをするという方法は当然なのであるが、しかし手紙にはそれ以上の趣もある。『キリスト教教会の歴史』を著した J.T.マクニールは、16 世紀のジョン・ノックスや、国教会の迫害を受け幽閉されながらも 300 通を超える手紙を牢獄から出して霊的な感化を周囲に与え続けたサムエル・ラザフォード、そしてウェスレーを取り上げて、英国では、手紙が神学的な著作や説教集に勝るとも劣らない内実のあるものであると認め、こうした手紙が単に個人的なやりとりとして理解されるものではなく、人を知り、個人的にたましいをいやし、励まし、導くための牧会的・教育的手段であったことを高く評価している（J.T. マクニール『キリスト教教会の歴史』、日本基督教団出版局、311, 347 頁～）。

### Ⅲ. 堅固なキリスト者・憂鬱・予定論

「牧会者バクスターの主要な課題は、個人的な指導を通じて、回心を促し、あるいは脆弱な者、不安にある者、困難を抱える者を、『堅固なキリスト者』として成長させることにありました」と記して、梅津氏は『健全で堅固なキリスト者の性格について』と題されたバクスターの著作を紹介している。バクスターは、キリスト者を成長の度合いに応じて五段階に区分している。第三の段階は、「かなりの程度キリスト教の主要な部分を身につけている人々で、健全



『ピューリタン牧師バクスター』を読んで  
で健康な状態にあるが、完全とか、この世の生活において最高の形式あるいは  
段階にあるとは言えず、また日々との警戒や懺悔を必要とする弱さを持っている  
人々である（82頁）。そして、上の第四段階がウェスレーの言う「キリス  
ト者の完全」に近似であろうと思う。それは「異例とも言う程度に恩恵を  
獲得した、従って比較すれば完全とも呼びうるような強固な」人々であり、彼  
らは神を喜んで生き生きと愛し、天国を自分の至福と考え、喜んで自分の欲求  
を否定する人々だという（83-84頁）。

堅固なキリスト者を育てることを目標としていたバクスターであるが、彼は  
むしろ霊的エリートよりも弱い人に心をかけていたと梅津氏は解説する。「魂  
の医師」と呼ばれていたバクスターは、『キリスト教指針』のなかで、「思い  
悩み憂鬱にとらわれている人々への指針」をその症状を35項目にわたって説明  
し、個々に指導を与えている。そのような牧師は、今日の精神科医に近い働き  
をしていたであろう（87頁）。

ここで著者は憂鬱症と予定論との関係という興味深い課題へ論を展開する。  
バクスターは予定の教理が憂鬱症の一因となったと考えていた。「もしも神が  
自分を選んでおられないなら、自分が何を為しえたとしても、自分を救うこと  
はできない……次に、自分たちは救われていないと、強く思い込む」（89頁）。  
そうして、予定論はキリスト者に「私はいったい選ばれているのか」という深  
刻な問いを突きつけたとバクスターは考えていた。ここで梅津氏はバクスター  
を研究するきっかけとなったマックス・ヴェーバーを引用しながら、救われて  
いるかどうかとの不安が、逆にキリスト者を積極的に善き行いへと励ましてい  
た事実を指摘している（90-91頁）。バクスターは以下のように考えた。「神  
は人間を無関係に単純に救われるように選んではおらず、信じ、悔悛し、救わ  
れると関連づけて選んでおられる。だから、目的と手段が一体となっている。  
悔悛し、キリストと聖なる生活を選んだ者は、彼らは救済の手段と条件に選ば  
れている故に、救済に選ばれています」（91頁）。救われているとき、その目  
的になかった生き方へと選ばれていることになる、とバクスターは言う。目的  
（救い）と手段（悔い改めと信仰に基づいた聖なる生活）は調和して、キリス  
ト者はこの世の生活を過ごしているというのである。

ここで大切なのはバクスターがことさら自己審査の重要性を説いたことであ

ると著者は指摘する（94頁）。著者はバクスターの言葉を以下のように引用する。「それなしに（自己点検なしに）、われわれは自分自身をよく知らない」「自分自身を知らない者は、神をも何事をも正しく知らず、何事をも正しく行うことが出来ない。彼は理性的に正直に安全に生きることはできず、……平安の内に死ぬことも出来ない」。したがって「あなたの心と生活に注意を払うことを、あなたの絶えざる課題としなさい。あなた自身について、不注意であったり無頓着であったりしてはなりません」（94頁）。梅津氏は、「こうした心と生活の点検は、自己の救いについての判断、すなわち『再生した、義とされた身分にあるか否か』に関する判断でもありました」（95頁）と説明している。

## ●ウェスレー

予定論に直接関係していなくても、救いに関する憂鬱症との格闘は、アルダスゲイトを前にしたウェスレーには凄まじいものがあった。1725年にオックスフォードで霊的な覚醒を体験して以来、ホーリー・クラブ、後のジョージアとウェスレーは一貫して、バクスターが述べるような憂鬱の解消に努力してきた。当時のウェスレーの姿勢は、1730年2月28日に母スザンナに宛てて書かれた、ジェレミー・テイラーによる義認の理解に彼が賛同している手紙によく現れている。

私がかたいへん気に入ったのは、罪の赦しに関する彼（テイラー）の説明です。これほど明確なものに今まで出遭ったことはありませんでした。そこには、次のようにありました。福音において、罪の赦しは聖化です。すなわち、「キリストは、我々一人一人をその罪から背かせることによって、我々の罪を取り去るために来られたのです。」（使徒3:26）……我々が罪を憎み、恵みに成長し、聖化の状態に近づきます。これはまだ悔い改めを必要とする不完全な状態ですが、そこにおいて誠実な心と勤勉な努力があるなら、その誠実さの度合に応じて、罪の赦しを判断すべきです。というのは、これこそが福音的赦しだからです（下線・筆者）。だが、ホーリー・クラブからジョージアに乗り出し、神の御前に誠実に生きるためにあらゆる恵み的手段に励んでも、救われている確信が得られないばかりか、

『ピューリタン牧師バクスター』を読んで不安は募っていった。誠実を尽くせば尽くすほど、神の無制限な要求を意識し、それに達することのできない自分に絶望を感じた。日記をつけて繰り返す自己吟味は、まさに憂鬱症であった。確信を得るための手段を尽くして、以下のような憂鬱である。

「私が地の果てに行って学んだことは、自分は神の栄光を受けるにはふさわしくないもので、……私自身の行いも、苦しみも、義も、怒っている神を和らげることとはとうていできず、罪の中で最も小さいものさえ贖うことができない。いや、最善の行いでさえ、実はそれ自体が贖いを必要としており、さもなければ神の義なる裁きの前に私は立ちおおせることができない」（日誌、1738.2.1）。

こうした憂鬱症からウェスレーを救い出したのは、ドイツ敬虔主義のモラビア派であった。モラビア派は、義認の教理はルターから引き継いでいた。モラビア派の影響を受けたウェスレーは、キリストの贖いに対する絶対的な信頼としての信仰が与えられることを切望するようになる。

私の切望している信仰とは、キリストの功績によって罪赦され、和解されて神の好意へ入れられるという神への確信と信頼である。……私は、持っていればそれを自覚せずにはいられない、この信仰がほしい（日誌、1738.1.29）。

そしてウェスレーはアルダスゲイトの信仰義認の体験へと導かれた。このように、バクスターの救いの教理と決定的にウェスレーが異なる点があるとしたら、モラビア派に指導を受けたルター的な信仰義認の体験である。しかし、そんなウェスレーが、アルダスゲイトからまもなくして、あれほど影響を受けたモラビア派と袂を分かたず。

ウェスレーは、モラビア派の 静止主義(quietism)に、すなわち、神の御前に義とされることは、神から与えられる信仰がすべてであって、人間生活のいっさいは信仰への妨げになるので、救いを求める者はただ静かに神の働きを待つだけであるという論理に失望した。また、プロテスタント正統主義に派生した信仰至上主義 (sola-fideism) が、あたかも救いは信仰によってたましいと天国を結び付けるだけで、この世の実際の生活にさした関わりを持たずとも成り立ち得る、と言わんばかりの〈あの世的傾向〉(otherworldliness)を持っていることも

ウェスレーは危惧した。

モラビア派の信仰義認に欠陥があると思ったウェスレーは、英国国教会の伝道的神学から、信仰義認の後に善き業の強調があることを確認した。1738年11月12日、ウェスレーは、「信仰による義認に関する、この熾烈な論争点について、英国国教会の教理はどうなっているのか、さらに詰めて探求し始めた」。

『説教集』(Homilies)を開き、「救いについて」・「信仰につながった良き業について」・「真の、生ける、クリスチャン信仰について」という一連の、一貫した説教を読んだ。ここで初めて、ウェスレーは「信仰のみによって」という原理が、恵みの手段や良き業、そして聖化の教理へと、どのようにつながっているのか、その全体を把握した。信仰を強調する余りに良き業や聖化を軽視するモラビア派的な傾向を退け、認罪から義認へ、義認(信仰)から聖化へという救済論の順序を整えた。ウェスレーは、『Homilies』にある一連の説教の一つに要約出版し、それは彼の存命中19版を重ねた。

さて、こうして整理してしまうと、ピューリタンの敬虔に身をささげたウェスレーが救いに関する憂鬱症に陥り、モラビア派の信仰義認を体験し、その後英国の宗教改革以来の義認と聖化を共存させた伝統的英国国教会の神学へ帰ってきたという流れに見える。だが、あらためて確認すべきは、回帰したとき、国教会のクランマー神学に回帰しただけでなく、ウェスレーはバクスターが教える「救われているとき、その目的にかなって聖なる生活を選ぶ」、そしてその道を行く者が最終的に救われるという理解を携えてきている。

これが、ウェスレーの義認論をより複雑にする、「最後の義認」の強調である(拙著『ウェスレーの神学』, 1990, 401-11頁)。ウェスレーは義認を二重に説いている。両方ともそれは信仰による。しかし、その意味合いは異なる。初めの義認の信仰は、神に差し出す徳を何も持たない、ただ単純にキリストに依りかかる空の手の信仰である。ところが、真実な信仰が人に与えられると、その人は「ある種の固有の特質・気質(すなわち、神と人への愛)なしには」存在し得ないほどの霊的実質を得るようになる。そしてウェスレーは、「この特質こそが我々が天の王国に入るための備えとなるのである」と主張している(Works x, 273)。聖霊の働きによって信仰者の内に形成される固有の義(inherent righteousness)である聖化は、その人物の信仰が真正なものであるという証しで

『ピューリタン牧師バクスター』を読んであるばかりか、永遠の世界への実質的準備であるという。よって、「最後の義認の通常条件」となっている信仰は、パウロの言う「愛に働き出ている信仰」、ヤコブの言う「行いによって全うされた信仰」であるという（『さらなる訴え』, part I, iii, 1）。

おそらく、このことを最も明確に伝えているのが、ウェスレーの晩年の説教127「婚礼の礼服」(The Wedding Garment)であろう。ウェスレーは、天国の婚礼にふさわしい礼服（マタイ 22）とは、我々の「不潔な着物のような我々の義」（イザヤ 64:6）を覆うために、キリストから借用したところの染みなき・汚れなき義ではなく、キリストから恵みの力によって分与され、自分のものとなった礼服、すなわち我々のきよい心と行いを指していると解釈している。そして、そもそもこの婚宴にふさわしく自分を整えることに、福音の最終的な意義があるという。キリストを信頼する信仰が、「生ける、救いの原理」(a living, saving principle)であるかぎり（『熱心な訴え』、S 49）、それは神と人とを愛することへと信仰者を駆り立て、キリストの御形へと変貌させ、最後には「聖くなければ、誰も主を見ることはできない」という標準へと信仰者を高めていく力を持っている。この力が成就されていく過程が救いであるとする、最後の義認は、キリスト者の生涯を真実に歩んでいく者に、これまでの成長過程の終着点となる。つまり、愛によって働く信仰、すなわち聖化とそれにのっとった生活が最後の義認が与えられるための「条件」とウェスレーが言ったとき、それは、最後の義認は現在の救いの健全な信仰・成長を条件としている、と言うのと同義であろう。現在の救い、すなわちキリスト者の生涯を通して発揮されてきた「恵みの証跡」に依拠して、神はその人物を最後に義とされるということである（拙著、404-406頁）。

論理から言えば、予定論の逆となる。予定論は救いの結論を論理的にはじめに設定して、救いに予定された者は、それに相応しく歩むと考える。最後の義認は、救いを前提ではなく、結論としてもってくる。つまり、人は神の主権によって救いに予定されているのではなく、神の主導に応答し、自らの罪深さに絶望し、キリストの贖いに単純に信頼する時に賜物として与えられる。しかし、すでに与えられた救いが完成に至ることができるのは、その信仰が愛のうちに働き出し、時が許されれば結実を生み出すことが当然のこととして求められる。

すなわち信仰に相応しく生きるときに、救いは完成する。

実は、ここに興味深い接点がバクスターとウェスレーとの間に存在することを指摘しておかなければならない。予定の教理に対する「立ち位置」についてバクスターが微妙であることを、梅津氏は指摘している。先に引用した「神は人間を無関係に単純に救われているように選んではおらず、信じ、悔悛し、救われると関連づけて選んでおられる」とのバクスターの言葉を受けて、梅津氏は以下のように注釈を加える。

たしかに、このバクスターの指針は、厳格な「予定の教理」から見れば逸脱と見られないでもありません。神は永遠の昔から神ご自身の意志で、ある人々を選んでおられる。これに対してバクスターは、人間は信じ、悔い改め、救われると語っているからです。この信じかつ悔い改めという行為を、救いに至る人間の可能性を評価しているものと解釈して、バクスターには予定の教理とは対極的なアルミニウスは的傾向があるといわれる場合もあります。(91頁)

実は、そう考えた古典的な人物がウェスレーであり、カルヴァン主義もアルミニウス主義にも詳しいジョン・フレッチャーであった。ウェスレーは、年会で伝道者の学びにバクスターが最後の義認をも含めて義認を論じている、*Aphorisms of Justification* をテキストに使った。また後期ウェスレーの神学的継承者と言われたフレッチャーは、バクスターや同じピューリタンのフラヴェル (John Flavel) をしきりに引用して、最後の義認の教理を確立していった(拙著 402; なおバクスターの義認論は、James Packer, *The Redemption and Restoration of Man in the Thought of Richard Baxter*, Vancouver, Regent Publishing, 2003 に詳しい)。

#### IV. 善き業とキリスト者の人格形成

堅固なキリスト者へと成長する道筋は、予定論の心理的側面から説明されているが、もちろんそれだけではない。キリスト者の生き方を方向付けていた神学原則としてバクスターが考えていたことを、著者はそこかしこに記して、論を展開している。一読者の視点から、それを三点まとめてみる。

『ピューリタン牧師バクスター』を読んで

第一に、「主人キリストに対する雇人としての関係」(105頁)、いわゆるピューリタンのステewardシップの理念がある。梅津氏はバクスターを引用して次のように記す。「あなたがたが神から受けた能力をよく知り、それを活かすためにどのように用いるべきかを考えなさい。」「少なくともあなたの重要な能力をどのように用いたかを、説明するようにしなさい」(105-06頁)。

第二に著者は、バクスターが、祈りや黙想という「思索的生活」を念頭に入れながらも、人間の外的行為、活動を重要視していたことを指摘している。それは単に、バクスターが神学者・思索家である以上に激動の時代を生きた牧会者であったということではなく、人間の活動・働き・善き行いを重んじることの出来たプロテスタントの神学者であったということである(往々にして、プロテスタントの神学者は信仰義認を重要視するがあまり、善き行いの意味づけを軽んじる)。著者は次のように記している。「神に祈ること神に想いを集中すること、それだけが重要なものではありません。それと共に現実に、手を用い身体を用いて、他者のために役に立つことを実際に行動で実現することが大事なのです。神と人を愛するというのは、単なる心の状態だけではなく、実際に何事かを為すことなのです」(125頁)。

第三にキリストとの人格的な関係、キリストへの感謝と応答である。キリスト者の生活は、キリストの恵みと愛への応答であるという、ある意味、キリスト者の生活を論じる者ならだれもが土台としていることに、梅津氏は的確にバクスター独特のアクセントを付加している。「バクスターの場合には、その感謝にしても、愛にしても、安定的で持続的であることを求めたのです。神への感謝も、人々への愛も、あるときには燃え上がったとしても、あるときには簡単に消えてしまわないとも限らない。堅固なキリスト者とは、その感謝を、その愛を持続させることができる人であり、安定した性格の持ち主で、そのためにはある種の訓練が必要だったのです」(140頁)。

その、ある種の訓練(修練)とは、例えば、日常生活全般にあって時間を大切にすること/時間を取り戻す(redeem)という教えに現れている(108-111頁)。「睡眠時間を適切な程度にし、貴重な朝の時間を床の中でのろのろと無駄に過ごすことのないように」「健康な人には、約六時間が適当で、それほど健康ではない人には七時間、脆弱なもの、高齢者には普通は八時間」、あるいは

は着衣の時間に関しても「自尊心や時代のファッションがあなたを愛して、朝の着衣の際に、長い時間を取って盛装することのないように決意しなさい。すみやかに着衣できる服装をしなさい」と、著者はバクスターの言葉を引用しながら、ピューリタンの聖潔の基本が時間の取り扱いに現れることを説明している。こうして日常生活の修練は、家庭礼拝の持ち方、仕事の仕方におよび、無益な話を避けること、度を過ぎたスポーツやゲームや観劇を控えること、あるいは、読書も戯曲や恋愛小説に夢中になって、空想力や感情を墮落させたり、病的な趣向に走ること（112-15 頁）、食事に過度のお金や時間を費やすこと、など警戒されている（126 頁）。

さて、このような訓練・修練を通して、キリスト者が成長していくとき、バクスターは興味深い表現を用いたことを著者は記している。それが人格・人生全体におよぶところの「統御」である。著者は以下のように記している。

（バクスターの）『キリスト教指針』は、人間の行為の諸問題を取り上げる際に、人間的な個々の能力とその具体的な活動に即して取り上げています。「思考の統御」「感情の統御」「感覚の統御」「言葉の統御」「身体の統御」といった課題が設定されているのですが、こうした諸章を通して、人間が思考し、感情と感覚をもって生き、語り、また心身の能力をもって労働する姿が捉えられ、指針を与えられているのです。

ここで注目されるのは、人間の様々な活動に対して「統御」という課題が与えられていることです。統御、もとの言葉は Government という言葉ですが、普通は政府とか統治と訳される政治にかかわる言葉です。この言葉をバクスターは、人間的な諸活動を適切に方向付けるという意味で用いています。一人一人が自分の生活を統御すること、家庭も統御すること、教会も統御すること、国家も統御することを課題としているのです。

そうしないと人間的な諸活動は、無方向に衝動的に流れてしまう危険性があるのです。……（125-26 頁、下線・筆者）

「無方向に衝動的に流れてしまう」危険性を踏まえて、ここで著者は、感情の統御と性格形成をバクスターがどのように考えていたかを説明する（127-131 頁）。「衝動的な、過度な、常軌を逸した願望、快樂、希望、絶望、不満」な



『ピューリタン牧師バクスター』を読んで  
どに陥らないために、人は規律をもって訓練する。それは訓練と言うよりも、意識して「神とキリストとの人格的な関係の中で生きること」であり、それによってキリスト者は「罪的な感情に囚われることなく、感情を聖化することができる」（130頁）と著者は説明する。

このように恵みによって「統御」され、成長していくキリスト者は、天国への道のりをより確かに歩んでいることを確信し、周囲もそのように見る。著者はバクスターの描くキリスト者の生活（性格や人格的成熟も含めて）を、実にわかりやすく、以下のようにまとめている。長文の引用になるが、本書にあって肝要と思われるので以下に引用する（97頁）。

……この世の生活はいわば『試みの生活』であり、来るべき生活を左右するものであったのです。いささか突飛な喩えですが、この辺りの信徒の心理は受験生の心理に似ているといえるかもしれません。受験生も、日々合格できるかどうか、今この時点で厳しく自己吟味しながら生きることを課題とされているからです。

受験生の場合も、点検の結果が良くても悪くとも、より合格に相応しくと、日々の勉強に勤しむことになるのではないのでしょうか。このように自己点検を繰り返しながら、良い結果が着実に出てくるようになると、受験生にはそれなりの自信というか、確信というか、ある風格が出てくるものです。まわりの者も、あの人は間違いなく合格するに違いないと一目置くようになることでしょう。

これと同じ様に、信徒たちも自己点検を繰り返し、一層義務の生活に勤しむことにより、ある風格が出てくるようになります。それが「恩恵の身分」にあることの証しであり、「見える聖徒」といわれた理由なのです。」（下線・筆者）

さらに梅津氏は、バクスターがキリスト者の自己点検・善き業・陥りがちな罪・日常生活について具体的かつ詳細な指針、チェック項目、ガイドラインをマニュアル的に提示していたことについても、興味深い喩えをもって説明する（122-23頁）。

こうした牧会者の姿はどこか今日のスポーツ・チームのコーチに似ているように思います。……コーチがどんなに理想的な姿を描き選手に提示

したとしても、不十分です。一人一人に即して、基礎力を強化し、弱点を克服し、試合の具体的な場面でどうすべきかを示さなければなりません。そのための行動のマニュアルを準備し、現実に身につけるところまで導いて行かなければならないのです。

スポーツでいえば、良い選手となることは、良く身体が動くことです。しかし、良い信仰者となることは良く行動できることだといえ、行為主義との避難を招くことになるかもしれません。しかし、良い行動を示しつつ良い信仰を養うことは必要なのです。信仰は単なる心の状態ではなく、全人的態度なのですから。」（下線・筆者）

## ●ウェスレー

ウェスレーは自分の神学と働き（メソジスト）に神が託された使命を、「国を、特に教会を改革するために、そして全土に聖書のホーリネスを広げるため」（説教 107 「神のぶどう畑について」と捉えていた。ウェスレーが、この「聖書のホーリネス」を考えたとき、それは日常的・具体的であった。すなわち、ホーリネスは心の中にあるキリスト体験であったとしても、具体的に日常生活にかたちとなって現れ、そこでさらに磨かれて確かなものとなるという。

例えばウェスレーは、バクスターと同じく「時を贖う（取り戻す）」という表現を使い、キリスト者が一日をどのように計画し、そこにおいて神からゆだねられている時間を最善に使いこなすことは宗教的義務であると教えた（説教 93 「時を贖うことについて（On Redeeming Time）」）。祈りや聖書を読むこと、また信仰の友と交わるといった敬虔の業に修練するための時間を、日常の仕事でつぶしたり、労働の時間を怠惰や娯楽に費やしてしまったり、いつの時代にも共通する時間に関する曖昧な姿勢を矯正することをウェスレーは教えた。またバクスターと同じ意識で、必要以上の時間を睡眠につき込むことに注意を促し、もちろん適度の休息とリラックスは必要であるが、クリスチャン生活に怠惰は禁物であることを説いた。

またウェスレーは、「服装に関してメソジストと呼ばれる人々に対する助言」（Advice to the People Called Methodists with regard to Dress）や説教 88 「服装について」（On Dress）を記し、クリスチャンは、派手で贅沢な服装や当時ステータス・

『ピューリタン牧師バクスター』を読んでシンボルであったかつらや頭の飾りを避け、清楚で質素な衣服を着用し、飾るなら徳や善い行いで品性を飾るように訴えている。またウェスレーは当時の英国の劇場にまつわる風俗全体が俗化していたことや、賭け事・競馬・狩猟といった娯楽についても、批判を加えている（説教 143「公の娯楽について」(Public Diversion); 説教 79「消散について」(On Dissipation), 10; 説教 89「さらに優る道」(The More Excellent Way), v, 1-4)。

ウェスレーは「富」に関する教えを多々残しているが、それらも基本的にピューリタンの職業倫理に貫かれていると言えよう。しかし、説教 50「金銭の使い方について」にあるように、第一に「自分自身と隣人を傷つけることなしに、できる限り稼ぎなさい」、第二に無駄な浪費を避け「できる限り蓄えなさい」、第三に富を蓄え、富に執着する傾向に警戒し、愛の実践として「できる限り与えなさい」、そしてこの第三を特に強調したウェスレーは、梅津氏が指摘しているバクスターの職業倫理観の展開（131-138 頁）以上に、富の危険性（説教 87「富の危険性」）と慈愛の精神に力点を置いていたように思う。

さて、このように実生活の諸問題を細かく説教していくことは、エプワースの牧師館でのピューリタンの育ちにはじまり、やがて司祭になる決意をする時に読んで多大な影響を受けたジェレミー・テイラーの *Rules and Exercises of Holy Living and Holy Dying* に説かれている規律をもって生きることの大切さ、それを実践するオックスフォードメソジストと、ウェスレーの生涯にあって一貫していたことは事実であろう。しかし、1738年にオックスフォードで福音的な信仰義認を経験し、1739年の野外説教をもってメソジスト・リバイバルが始まると、ウェスレーが出版した説教は義認や聖化という教理的な色彩の強い説教や論説であった。だが、リバイバルの成熟期、すなわち 1760年代に入ると、急激に実生活の指針を打ち出す説教が増える。アウトラーが指摘しているように、リバイバルの中盤までに救済論という確固たる基礎を据えたウェスレーがその後、実生活という土俵でその神学の結末を展開しているように思える（*BE Works*, 1, 46）。そのとき、これまで生きてきたウェスレーの内にあるピューリタンの原則が、より濃く、表現されていったように思う（拙著、267-275）。

ウェスレーのピューリタンの精神を代表しているのは、説教 51「良い管理人」であろう。キリスト者は、創造において神の銘を刻まれ、贖いにおいて代価を

払って買い取られた神の所有である（Iコリント 6:19-20）。したがって、実生活のあらゆる局面・瞬間において神の御心を求め、神によって託されている才能・時間・富・家族・身体・仕事を御心にかなって正しく運用することが求められていて、キリスト者の敬虔は管理人としての自己意識にかかっている、という。あるいは、説教 41 「さまよえる思い」や晩年の説教 79 「消散について」（On Dissipation）の考え方もバクスターの「統御」に似ている。人の願望や思ひは、神という中心からはずれると、滅び行く、つかのまの、決して満足の得られないこの世の事柄の回りに消散されてしまうとウェスレーは警戒している。世に対して不注意な姿勢をとっていると、それは「キリストに対する一意専心な姿勢(simplicity towards Christ)から我々を遠ざけてしまう」（説教 79, 3）。そのような消散を退ける修練を重ね、拡散する人生のエネルギーを神の栄光という目的に集約している状態がバクスターの言う「統御」に比することができよう。

さて、このようにより厳しく規律をメソジストの日常に当てはめて教えるウェスレーは、当時の俗化した英国の世情に改革を求めていただけでなく、信仰義認が強調されて、生活や行動が置き去りにされていく、当時のリバイバル現象を警戒していた。以下はウェスレーがメソジストのための信仰雑誌 *Christian Library* に、バクスターの『キリスト教の指針』に類した *The Whole Duty of Man* (1657, ピューリタンのリチャード・アレストリーの作と言われているが、断定できてはいない) の要約抜粋を掲載したときに、それに付加した序文であるが、そこにウェスレーが 17 世紀ピューリタンのように具体的なキリスト者の生活を指導してきた危機意識が述べられている。

以下の抜粋を読む人は、誰であってもそれが記された時代を考慮していただきたい。キリストへの信仰・信仰による義認・御霊の実などに関しては、これほど多く語られた時代はなかったと思う。ところが、正義・慈悲・真実といった単純な道徳的義務に関しては、これほど話題に上らなかった時代もない。そんな時代であるから、大概に無視されてきた問題を説き聞かせる必要が特にあったと言えよう。……以下に記されている事柄が、「あなたがたは、恵みの故に、信仰によって

『ピューリタン牧師バクスター』を読んで「救われたのです」という原則や「キリスト・イエスにある贖いによって自由に義とされたのです」という原則と矛盾しているとは思わない。……望んでいることは、すでにキリスト・イエスにある神の自由な恵みを体験した人々が、これによって、キリストの内に歩むことをより深く (more fully) 教えられ、すべての善き言葉と業により徹底して (more thoroughly) 備えられるようになることである。(拙著、275頁)

このようにして実生活で敬虔の修練を重ね、心と生活と行いが、現実に神の御旨のうちに (バクスターの言う) 統御されている状態が、ウェスレーの「キリスト者の完全」の状態であろう。無論、以下のようにウェスレーの完全論は、バクスター神学にはない、独特な展開がなされている。

ウェスレーの完全論の核をなしているのは、全き愛(perfect love)の内的な体験、そこから流れ出る動機の純粹さ(purity of intention)である(説教76「完全について」、拙著293-298頁)。そして愛による完全を保っている者は、知っている神の律法を意識的に犯すことはしないし、また心が神の愛に満たされている故に、様々な欲望や邪悪な考え、すなわちキリストに反する思いから解放されている。ウェスレーがキリスト者の完全を「愛」を中核に定義したとき、それは天使のレベルの完全でも、絶対的・倫理的な完全でもないことを強調している。それは、神への純粹な愛・唯一神の栄光を求める動機の完全を意味している。従って、地上生涯において、信仰によって受ける神の恵みとして、聖霊は瞬時的にこの御業を心の中に成し遂げることができるというのである。

しかし、ウェスレーがキリスト者の完全を「愛」を中心に説明したとしても、それは単なる内的きよめでも心情体験でもない。また、完全が「毎瞬」という言葉で説明されていても、それは、一瞬現れて、次の瞬間には消えてしまうようなものではない。神の栄光を求めることが、その人物の「不動の視点」となり、動機の純粹さが「魂全体を行き巡り、心の隅々を満たし、すべての思いと願いと目的と不変の源泉となる」時、初めて表明できる恵みの体験である(説教12「我々の霊の証し」, §11)。

確かにこれを全き愛の〈状態〉と呼んでいいのか、ウェスレーは躊躇している。なぜかと言えば、状態という概念は、そこから成長することも下降するこ

ともない一つの達成された領域を示唆し、あたかもその域に達するとすべてが完了したという誤解を生む危険性があるからである（手紙、to Several Preachers and Friends, 1771.7.10, § 8）。しかし、全き愛は「状態」ではないにしろ、それに類するところの不動性・堅実さ・安定性・質性というものを伴っていなければならない。つまり、毎瞬という概念は、献身の姿勢において、あるいは気質や行動において上下動の激しい信仰者の言い訳にはならないということである。自分は全き愛を今の時点で体験していると告白しながらも、次の時点で生活の端々に全き愛と矛盾するような言動や行動が頻繁に現われるとすれば、その人物は、未だその域に達していないとするのが真実である。

このように、ウェスレーにとって、完全とは名称にふさわしい高位な水準であり、「全き人」の心は全き愛をある時点で受けたというばかりか、その愛の内に確立されていることが期待されている。ある時、彼は選抜ソサエティーの会員と面談し、彼らの優れた靈性に驚きながら、次のように記している。

彼らは、……私の説いてきた「完全」の証人である。彼らが、この完全から墮落するかも知れないということは、私は認める。しかし、彼らは、墮落するに違いないということは全的に否定するものである（日誌、1770.3.15）。

全き愛は、神の栄光を純粹に求めるばかりか、常に、一貫して求めることである。その意味で、キリスト者の完全とは、毎瞬きざみの神との「関係」に基づくものであるが、それは人格そのものに影響を及ぼす、内的な「質」(habitus)としてウェスレーが理解していた。

ウェスレーの完全論に東方教父の神学の影響があり、時に実存主義的な光が見えることを、筆者は否定する者ではない。しかしあらためて、バクスターの規律・修練・統御を考え、ウェスレーの完全論やキリスト者としての人格形成の全体を考えると、17世紀の英国のピューリタニズム、バクスター、またウィリアム・ローの『キリスト者の完全』と、ウェスレー研究者は向き合うべきであろうと思う。

(インマヌエル高津教会牧師)